

日本と中国のジオパークの比較からみたジオツーリズムの特性 —観光客へのアンケート調査から—

楊 燕*

摘 要

1999年、ユネスコがジオパークを提唱してから、世界ジオパークネットワーク(GGN)は急速な発展を遂げた。日本国内もジオパークが増えつつあり、ジオパークにおけるジオツーリズムは地域振興を実現するための手段として注目を浴びている。

本論文は、中国の伏牛山世界ジオパークと日本の島原半島世界ジオパークで観光客を対象としたアンケート調査を実施し、ジオツーリズムの特性について明らかにすることを目的としている。その結果、ジオパークやジオツーリズムに対する日中の観光客の意識には相違点のあることが分かった。具体的には、日本におけるジオツーリズムは、ストーリー性を重視する点、かつて自然災害に遭ったなど厳しい状況下にある地域の地域振興手段として推進される点が挙げられる。一方、中国では、ジオツーリズムが地形・地質も含んだより広範な自然観光と認識され、着実な来訪客の増加が見込まれることから、必要な基盤整備や人材育成に必要な財源は、国が保障している。また、各自の課題も持ちながら、GGNが掲げるジオパークの目標を達成するために、住民がジオパークの仕組みやジオツーリズムに対する意識を高める必要性への認識は共通して見出された。

主題語: 伏牛山世界ジオパーク、島原半島世界ジオパーク、ジオツーリズム、認知度、地域振興

* (日本) 日本長崎大学大学院 水産口環境科学総合研究科博士後期課程. E-mail: yangyansky@live.jp

1. はじめに

1.1 問題の所在

日本は長引く不況などにより、地方の抱える課題がさまざまな分野で顕在化している（斎藤, 2010 ; 小寺, 2011）。地域経済においては、地場産業の衰退による産業の空洞化、海外への企業移転や廃業などによる雇用の減少、財政難に伴う公共事業削減やサービスの低下、人口の減少と急速な高齢化による地域購買力の減少、福祉や医療負担の増大による地方財政の圧迫、若者の人口流出（過疎化）による地域の担い手不足など、地域社会の抱える課題は複雑多様化している。

こうした厳しい局面を打開するため、地域再生や地域活性化の取り組みとして、1990年代後半から、地域固有の資源を活用することの重要性が強調されるようになった（遠藤, 1995 ; 目瀬, 1998 ; 加藤ほか, 2003 ; 太田, 2010 ; 関谷, 2013）。このような情勢を背景に、2007年に日本国内で普及の緒に就いたジオパークは、地域振興の手法として注目を集めるようになった（宮原, 2008 ; 梶原, 2014 ; 高木, 2013）。

近年、日本国内ではジオパークに関心を持つ地域が増えつつある。2016年9月現在、日本のジオパークは43地域に達し、そのうち世界ジオパークに8地域が認定されている。このほか、日本のジオパークを目指している地域は14を数える。ジオパークは、地域にある「大地の遺産」を保全・保護するとともに、それらを活用することによって地域の活性化を図っていくことに大きな特色を持つ（渡辺, 2008 ; 2011）。そこで、ジオパークにおいて持続的な活性化を観光と結びつけるために、ジオツーリズムの役割が重要である（大野, 2011）。Dowling（2011）は「ジオツーリズムはユネスコのジオパークに不可欠な要素であるため、その発展は極めて重要だ」と指摘し、岩田（2012）も「ジオパークの成否は、ジオツーリズムの定着に懸かっていると看做しても過言ではない」と述べている。しかし、日本では、地域振興に関して、「ジオパークは観光に役立つ」というイメージが定着しつつあるのは確かであるが、観光客が目に見えて増加するまでには至っていないのが現状である（目代ほか, 2012）。また、大野（2011）は、従来から観光客が多い地域は、ジオパークに認定されても観光客の増減に与える影響は目に見える形で現れにくい現状があると述べている。そして、ジオパークが地域経済に与えるインパクトを検証するためには、観光関係者に協力を呼びかけ、観光客を対象に系統的なヒアリング調査等を行い、ジオパークの見学を目的とした観光客の実態を把握する必要があると指摘している。

実際に、日本でもジオツアーの参加者を対象として、満足度等の調査が行われてきた。大野（2011）は、島原半島世界ジオパークでは市民を対象としたジオツアーの参加者に対して、ジオツアーに対する満足度などについてアンケート調査を実施した。その結果、ジオツアーは地域理解に大きく貢献しているが、ジオパークに対する認知度の向上やジオガイドの養成などが課題であり、特に、ジオパークの見どころを物語（ジオストーリー）にして、市民や観光客にわかりやすく伝える工夫が求められることを強調した。そのジオストーリーは地形・地質に関する専門知識と、地域の歴史、文化、などを有機的につなげたものとし、地域住民にとって地域の再発見を促し、大地の遺産の保全の意識を芽生えさせるきっかけになりうる。そのため、ジオパークにおける地域振興のキーポイントは、いかに魅力的なジオストーリーをつくるかという点と、そのストーリーをいかにうまく地域住民や観光客に伝えるか、という点にある（大野, 2011）。そこで、伝える担い手としているガイドの養成がより重要になっている。田代・尾方（2012）は、ジオパーク認定を目指す沖縄本島北部でのジオツアー参加者を対象に意識調査を実施し、ジオパークという言葉の認知度やツアーに対する満足度等に言及している。ただしこれは、参加者の中に近隣地域の住民が多く含まれている点に留意する必要がある。すなわち、地域住民のジオパークやジオツーリズムに対する意識の把握に加えて、住民が求めるジオツアーと、地域外から訪れる観光客が期待するジオツアーとは必ずしも一致しない側面が指摘されるからである。このため、大野（2011）が指摘したように、ジオパークを訪れる観光客を対象にした調査も必要となってくる。

日本で、上述の視点に立った先行研究は、観光客のジオパークに対するイメージについて明らかにした深見・有馬（2011）がある。同論文は、九州にある四つのジオパークを調査地域とし、そこを訪れた観光客に、ジオパークの持つイメージに関しアンケート調査を実施している。結果、ジオパークの知名度は未だ高いとは言えず、用語自体に浸透の余地が大きいこと、ジオパークをエコツーリズムに似た観光形態と捉える場合が多いことが判明した。その調査は、2010年11～12月に行われたもので、ジオパークが日本においては、まだ新しい概念であるために、認知度が低いという結果につながったものと推察できる。また、同研究は、地域に対してジオパークの仕組みの本質と、導入の意義を地道に蓄積していく必要についても指摘した。また、宮本ほか（2011、2012）は、外国人を対象としたジオツアーにおけるモニター行動分析によって、外国人の観光客を誘致するための方策や工夫などを明らかにしている。

一方で、欧州と並びジオパーク先進地と呼ばれる中国は、ジオパーク認定地の急速な

増加によって、観光産業に多くの雇用機会と観光収入をもたらしている。例えば、2010年のジオパーク関連の観光産業における直接の被雇用者数は26万6,600人で、間接の被雇用者数は215万4,600人に達した¹⁾。観光客数と総観光収入も年を追うごとに増加しており、2010年末までに中国国立ジオパークの観光客数は4億3,800万人、入場料収入は226億4,900万元（約4,300億円）に達した²⁾。

これに対して、日本におけるジオパークの本格的な取り組みは、未だ10年を経過していない状況である。中国や欧州の先進地と比べ、理論も実践の現場レベルおよび研究上の蓄積も十分とは言えない。今後、日本においても質の高いジオパークを模索していくためには、欧州や中国といったいわゆるジオパーク先進地の事例に学ぶ必要があるだろう（矢島, 2009 ; Fukami, 2014 ; 渡辺, 2014）。

実際、まだ日本では先進地の事例を取り上げた研究は極めて少ない。今後、多彩な地域振興と結びつけたジオパークやジオツーリズムの在り方を検討する際には、先進地事例との比較検討を加えて考察、提言することが重要である。

1.2 研究目的と方法

上述の問題意識をふまえて、本稿は日本ジオパークの豊かな将来性を展望するために、取り組みが比較的進んでいる中国のジオツーリズムと、模索の途上にある日本を対比させ、それぞれの特徴と課題を洗い出すことを目的とする。

具体的には、日本（島原半島世界ジオパーク）と中国（伏牛山世界ジオパーク）のそれぞれを対象地を選定し、現地を訪れる観光客を対象にしたアンケート調査から、観光客のジオパークやジオツーリズムに対する意識を把握する。その結果を比較しながら、ジオパークとジオツーリズムの定義を踏まえ、日本と中国のジオパークにおけるジオツーリズムの特徴と課題を提示する。

島原半島世界ジオパークは、2009年に日本で初めて世界認定された地であり、ジオツーリズムの展開がなされてきた蓄積が比較的多いことから、日本におけるジオツーリズム

1) Chinese Geoparks Network製作のCD「中国地質公園」（2012年4月）による。

2) Chinese Geoparks Network製作のCD「中国地質公園」（2012年4月）による。

3) 世界ジオパークは4年に一度の現場での再審査が義務づけられており、審査によっては認定が取り消されることもある。

の利点と課題の現状を調査する対象として適切と考えられる。伏牛山世界ジオパークは、中国の河南省に位置し、2006年に世界認定されている。中国ジオパークネットワークによると、伏牛山世界ジオパークは主に地質の科学普及広場として知られている。具体的には、自然博物館、恐竜遺跡園、地質広場などの学習・展示施設や観光探察路、地質・地形の学習ツアーや歴史・文化・伝統などを融合させたジオストーリーを通じて自然・文化・地域社会とのつながりなど多面的な視点でジオサイトを楽しめるツアーの実施などが挙げられる。2010年に再審査³⁾を受けた際にも、その活動は高い評価を得ている。中国は世界各地のジオパークの中で、先進事例と位置づけられる取り組みを行っている場所が数多くあるが、伏牛山世界ジオパークはその主導的立場にあるとされる。そこで、本ジオパークに注目することは、島原半島世界ジオパークを含め、日本のジオパークが、今後さらにジオストーリーを組み立て、いかに観光客にそれらを伝え、それによって地域に経済効果をもたらすことができるのかを検討する際に、有益な示唆を与えるものと考えられる対象と位置づけられる。

このため、筆者は比較検討対象地として、島原半島世界ジオパークと伏牛山世界ジオパークを選定した。

2. ジオパークとジオツーリズム

2.1 ジオパークの定義

ジオパーク構想は、1990年代の半ばに、地質遺産の保護に対する国際的な意識の高まりの中で生まれた。2015年ジオパークが世界遺産と同様にユネスコの正式プログラムになった。

世界ジオパークネットワーク（略称GGN）は、ジオパークを下記のように6つの観点から定義している（深見, 2010）。

- ① 地域の地史や地質現象がよくわかる地質遺産を多数含むだけでなく、考古学・生態学的もしくは文化的な価値のあるサイトも含む、明瞭に境界を定められた地域である。
- ② 公的機関・地域社会ならびに民間団体によるしっかりした運営組織と運営・財政計画を持つ。
- ③ ジオツーリズムなどを通じて、地域的持続可能な社会・経済発展を育成する。
- ④ 博物館、自然観察路、ガイド付きツアーなどにより、地球科学や環境問題に関する

教育・普及活動を行う。

- ⑤ それぞれの地域の伝統と法に基づき地質遺産を確実に保護する。
- ⑥ 世界的ネットワークの一員として、相互に情報交換を行い、会議に参加し、ネットワークを積極的に活性化させる。

一方、日本ジオパークネットワーク（以下、JGNと記す）では、「ジオ（地球）に親しみ、ジオを学ぶ旅、ジオツーリズムを楽しむ場所がジオパークです。山や川をよく見て、その成り立ちとしくみに気付き、生態系や人間生活との関わりを考える場所です。足元の地面の下にある岩石から宇宙まで、数十億年の過去から未来まで、山と川と海と大気とそこに住む生物について考える、つまり地球を丸ごと考える場所、それがジオパークです」⁴⁾とされている。

また、陈安泽（2003）は、中国の国立ジオパーク（国家地質公園）について、次のように述べている⁵⁾。

「特殊な科学的意義、稀有な自然、美学的な鑑賞価値をはじめ、ある程度の規模や国内を代表する地質遺跡を持ち、更に自然景観や人文景観と融合した特定の地域をいう。また、地質遺跡の保護、地域経済の発展の促進、文化と環境の持続可能な発展を趣旨とし、人々に科学的に質の高い観光、レジャー、療養、研究、地球科学の普及など教育の場を提供するもの。」

ジオパークにおいて、GGNの定義に明文化された3つの目的は、①次世代のために地質遺産を人類の貴重な「大地の公園」として守る、②博物館など施設を整備し、地質景観や環境問題について広く一般市民を教育し、同時に地球科学分野の研究の場を提供する、③ジオツーリズムなどを通じて持続可能な経済的開発、地域社会の発展を保障することであるが、本はジオパークの三つの活動要素（保護・教育・ジオツーリズム）においては、教育とジオツーリズムに重点を置き、大地の遺産を保護することはそれほど強調していないととらえられる。その一方、中国の国立ジオパークの定義では、「質の高い観光、レジャー、療養」という言葉から、ツーリズムへの特化が伺える。つまり、国ごとに考え方の濃淡が見られる。

2.2 ジオツーリズムの定義

4) JGNホームページによる。http://www.geopark.jp/about/。2016年8月11日閲覧。

5) 中国語原文のものを筆者が日本語訳した。

観光産業の新たな形態としてのジオツーリズムは極めて現代的な概念であるため、それに対する解釈も多様である。2006年に、Dowling and Newsomeのジオツーリズムに関する総合的な本を出版したことによって、現代的なジオツーリズムの概念を世界中に広げた。Dowling and Newsome(2006)は「ジオツーリズムのGeoの部分が、地質学と地形学、景観、地形、化石床、岩石鉱物などの自然資源と関係しており、そのような特徴を造ったか、あるいは造りつつあるプロセスを正しく理解することに主眼点がある」と定義した。

ここで、中国におけるジオツーリズム研究開拓者の庄寿強教授は、「ジオツーリズムは地質と直接関連するツーリズム、遊びと娯楽を主な活動としており、実際は、遊び戯れる過程の中に、地質に関する興味や知識を若干加えるツーリズム」（許涛・田明中, 2011）と定義している。

また、日本では、平野(2008)が、ジオツーリズムとは、「地質や自然に対する興味や関心と明確なテーマを持った子どもたちや市民がフィールドを訪れ、現地の地質や自然の実物・本物に触れて感じ、学び、遊び、楽しみ、体験し、オンサイトインフォメーションを取得する」ことを目的とした「地質ジャンルのオンサイトツーリズム」と定義づけた。

菊地ほか(2011)では、ジオツーリズムあるいはジオツアーは、「ジオサイトを中心としてそれらと地域資源とを結びつけた観光」としている。なお、ジオサイトは、一つの景観、地形グループ、単独の地形、岩石の露頭、化石床あるいは化石が存在する場である(横山, 2014)。

ジオツーリズムは、地球科学的な資源の保護・保全をしながら、さらに研究と教育に資するため、地域の地形、地質を中心とした自然遺産や文化遺産を来訪者や観光客に伝えることがより重要になる(Newsome and Dowling, 2010)。しかし、地球科学に関する専門的な情報と、それに裏付けられた学術的価値は一般の人にはなじみが薄く、とっつきにくく難しいというイメージをもたれがちである(深見, 2010)。難しい、イメージがつかめにくいこそ、体験がより重要なアプローチ方法として求められる。つまり、ジオツーリズムは観光客が大地の遺産と触れ、楽しく体験を通じて、その成り立ち、進化プロセス、価値及び人類にもたらす啓発などの地球科学に関する知識を得られるツーリズムになるべきであろう。また、観光の対象として比較的主流をなす地域の歴史や文化を生態系や自然環境、地球科学と関連させたストーリー性を強調することで、そのとっつきにくさを払拭して、広く一般への知見の拡大を促すことができる(大野, 2011)。

3. アンケート調査の概要

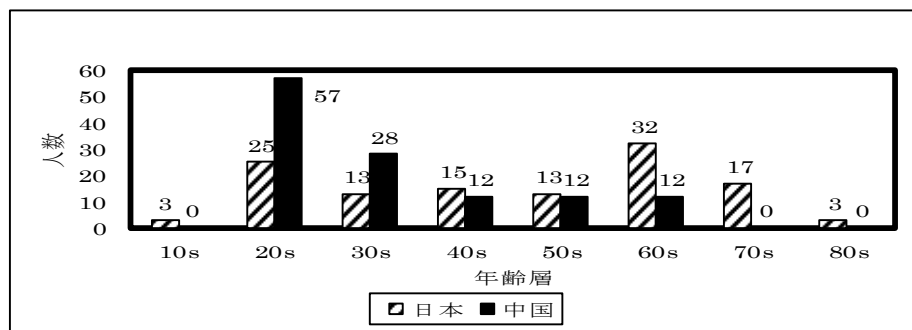
筆者は、伏牛山世界ジオパークにおいて2012年9月に、島原半島世界ジオパークにおいて2013年10月から2014年1月にかけて、それぞれの地を訪れた観光客を対象にアンケート調査を実施した。両ジオパークで行ったアンケート調査の質問項目はほぼ同様である。アンケート用紙への回答は、観光客に記入を直接依頼し、いずれも121部のアンケート用紙を配布して121部を回収した。なお、島原半島世界ジオパークの調査は旅行繁忙期を避けて5回にわけて実施した。

質問項目は、自然、地質、環境、ジオパーク、ジオツーリズムなどをキーワードに焦点を当てる。そして、観光客がジオパークとジオツーリズムについてどのように理解しているか、ガイドに関する満足度を明らかにすることを目的としている。なお、観光客のジオパークに対する認知度や興味、それとガイドに対する評価に関する質問項目からなり、主に選択式による回答形式とした。

4. アンケート調査の結果

4.1 観光客の属性

観光客の年齢層について、まず、伏牛山では、年代別に20代が57人、30代が28人、40代が12人、50代が12人と60代が12人であり、20代と30代の観光客が多かった。島原半島では、60代の観光客の割合が一番高かった。次いで、20代、70代、40代、30代と50代、10代と80代にであった（<図 1>）。



<図 1> 観光客の属性 (年齢層)

観光客の出発地については、伏牛山世界ジオパークでは、沿海部の都市ならびに同ジオパークから比較的近隣の都市が多い。島原半島では、ほぼ九州内の地域からが多く、その中でも長崎県内が半数を超えた。

4.2 ジオパークに関する質問の回答結果

4.2.1 「あなたは世界ジオパークという言葉を知っていますか？」

については、伏牛山は「ある」92人（76%）、「ない」29人（24%）となり、島原半島は「ある」98人（81%）、「ない」23人（19%）となり、両ジオパークとも「ある」と答えた人が約80%を占めており、また、ジオパークという言葉を知っている人の割合は、島原半島の方が伏牛山よりやや高かった（<表 1>）。

<表 1> 言葉に口する認知度

調査地（ジオパーク）	聞いたことある（人、%）	聞いたことない（人、%）
伏牛山	92人、76%	29人、24%
島原半島	98人、81%	23人、19%

4.2.2 「ここは世界ジオパークであることを知っていますか？」

については、伏牛山は、「来る前から知っていた」という答が半数以上の80（66%）人を占め、残りの41人（34%）は「来てから知った」だった。島原半島は「来る前から知っていた」という答が74人（61%）、「来てから知った」のは、47人（39%）だった（<表 2>）。

<表 2> 調査地のジオパークに関する認知度

調査地（ジオパーク）	来る前から知っていた（人、%）	来てから知った（人、%）
伏牛山	80人、66%	41人、34%
島原半島	74人、61%	47人、39%

4.2.3 「ここは世界ジオパークであるということの情報はどこから得ましたか？（複数

回答可)」については、伏牛山は「インターネット」47人、「ここに来て看板や園内施設から」41人、「本や雑誌、新聞」39人とこの三つに対する回答が比較的多数を占め、次いで「知人、友人」11人、「テレビ番組」10人となった。島原半島では「本や雑誌、新聞」43人、「ここに来て看板や園内施設から」34人、「テレビ番組」34人で、この三つに対する回答が比較的多数を占め、次いで「知人、友人」23人、「インターネット」15人となった (<表 3>)。

<表 3> ジオパークに関する情報の得る手段

調査地 (ジオパーク)	インターネット (人)	看板・園内施設 (人)	本・雑誌・新聞 (人)	知人・友人 (人)	テレビ番組 (人)
伏牛山	47人	41人	39人	11人	10人
島原半島	15人	34人	43人	23人	34人

4.2.4 「中国にはたくさんの数の世界ジオパークがあることを知っていますか？」については、「知っている」64人 (53%)、「知らない」57人 (47%) と拮抗する結果となった。「日本の5地域が世界ジオパークであることを知っていますか？」については、67人 (55%) が「知っている」、54人 (45%) が「知らない」と回答した (<表 4>)。

<表 4> 世界ジオパークの数に対する認知度

調査地 (ジオパーク)	知っている (人数、%)	知らない (人数、%)
伏牛山	64人、53%	57人、47%
島原半島	67人、55%	54人、45%

4.2.5 「このジオパークに何を期待して来ましたか？ (複数回答可)」については、伏牛山は、「豊かな自然」を選んだ人が81人と圧倒的に多かった。「貴重な地質遺産」と「地域文化」はそれぞれ47人と46人、「知識を得る事」が33人だった。島原半島は「豊かな自然」を選んだ人が80人、「貴重な地質遺産」と「地域文化」はそれぞれ36人と34人とほぼ同数で続き、「知識を得ること」が28人だった (<表 5>)。2つのジオパークが同じように、60%以上の人々がジオパークに来る目的は自然を楽しむことである。

<表 5> ジオパークに来る目的

調査地 (ジオパーク)	豊かな自然 (人)	貴重な地質遺産 (人)	地域文化 (人)	知識を得る事 (人)
伏牛山	81	47	46	33
島原半島	80	36	34	28

4.2.6 「来る前に、このジオパークに関して、必ず見ないといけないスポットは何と
 思いますか？ (複数回答可)」に対しては、伏牛山では、すべての人が「必ず見ないと
 いけないスポットはある」と答え、多い順から恐竜遺跡園 (50人)、宝天曼 (39人)、
 龍潭溝 (13人)、白雲山 (11人) の順となった (<表 6>)。

<表 6> 伏牛山世界ジオパークにおいてみたいスポット

恐竜遺跡園 (人)	宝天曼 (人)	龍潭溝 (人)	白雲山 (人)
50	39	13	11

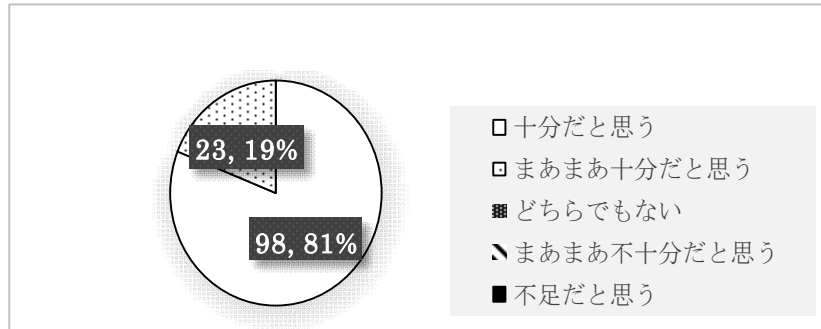
島原半島では半数以上の62人 (51%) の人が「特に見ないといけないスポットがある
 と思わない」だった。59人 (49%) の必ず見ないといけないスポットはあると思うとい
 う人 (複数回答可) は、35人が災害記念館や災害の跡などと回答し、残りの回答は多い
 順からは、湧水、自然、地質、四明荘、島原城、武家屋敷となった (<表 7>)。

<表 7> 島原半島世界ジオパークにおいてみたいスポット

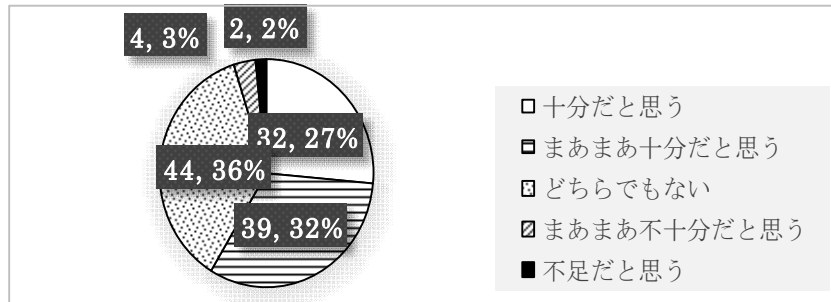
災害記念館や 災害の跡 (人)	湧水 (人)	自然 (人)	地質 (人)	四明荘 (人)	島原城 (人)	武家屋敷 (人)
35	9	8	7	6	5	2

4.2.7 「サイトにある案内板の説明については十分だと思いますか？」については、伏
 牛山は、「十分だと思う」91人 (81%)、「まあまあ十分だと思う」23人 (19%) であっ
 た。「どちらでもない」、「まあまあ不十分だと思う」、「不足だと思う」の回答はゼ
 ロだった (<図 2>)。島原半島では、「十分だと思う」32人 (27%)、「まあまあ十分
 だと思う」39人 (32%) であった。「どちらでもない」44人 (36%)、「まあまあ不十

だと思う」4人（3%）、「不足だと思う」2人（2%）だった（<図 3>）。

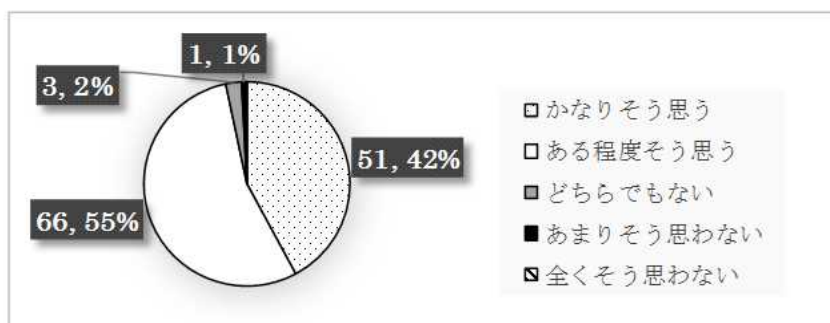


<図 2> 伏牛山世界ジオパーク内の案内板の説明に関する満足度

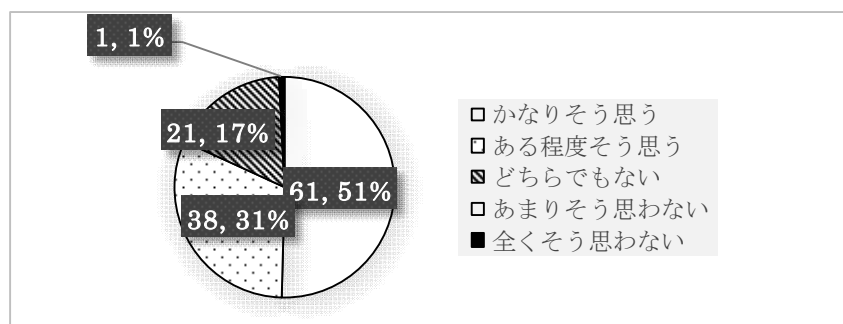


<図 3> 島原半島世界ジオパーク内の案内板の説明に関する満足度

4.2.8 「ガイドさんの接客能力については 足ですか？」については、伏牛山は、「かなりそう思う」51人（42%）と「ある程度そう思う」66人（55%）であり、合わせると、ガイドの接客能力については口足している人が、ほとんどとなっている。「どちらでもない」、「あまりそう思わない」はそれぞれ3人（2%）、1人（1%）と極めて少口にとどまっている。「全くそう思わない」と回答した人はいなかった（<図 4>）。島原半島では、「かなりそう思う」61人（51%）と「ある程度そう思う」38人（31%）であり、合わせると、ガイドの接客能力については口足している人は8割を超えた。「どちらでもない」21人（17%）、「あまりそう思わない」の回答はなく、1人（1%）「全くそう思わない」と回答した（<図 5>）。



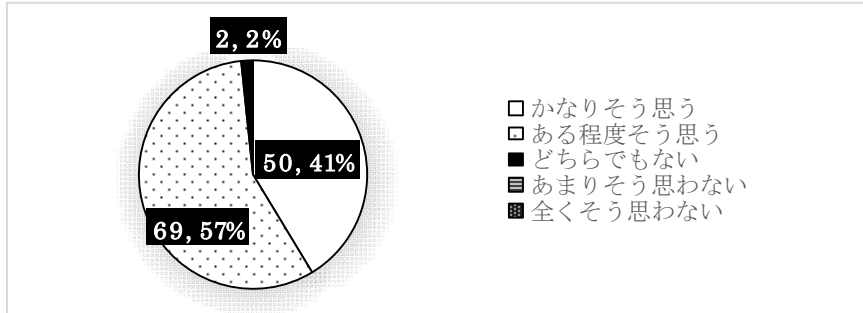
<図 4> 伏牛山世界ジオパークのガイドさんの接客能力についての満足度



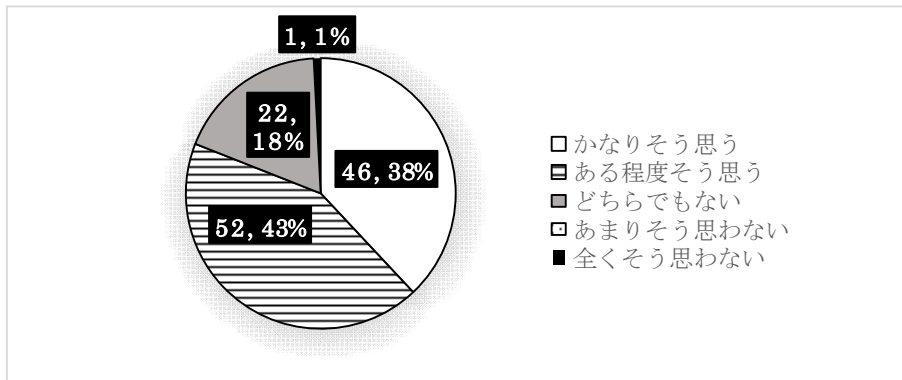
<図 5> 島原半島世界ジオパークのガイドさんの接客能力についての満足度

4.2.9 「ガイドさんの解説を聞いて能率よく知識を得ましたか？」については、伏牛山は、「かなりそう思う」の50人（41%）と「ある程度そう思う」の69人（57%）を合わせると、全体のほとんどを占めた。「どちらでもない」は2人（2%）、「あまりそう思わない」と「全くそう思わない」の回答はゼロだった（<図 6>）。

島原半島は、「かなりそう思う」の46人（38%）と「ある程度そう思う」の52人（43%）を合わせると、全体の8割を占めた。「どちらでもない」は22人（18%）、「全くそう思わない」の回答は1（1%）だった（<図 7>）。

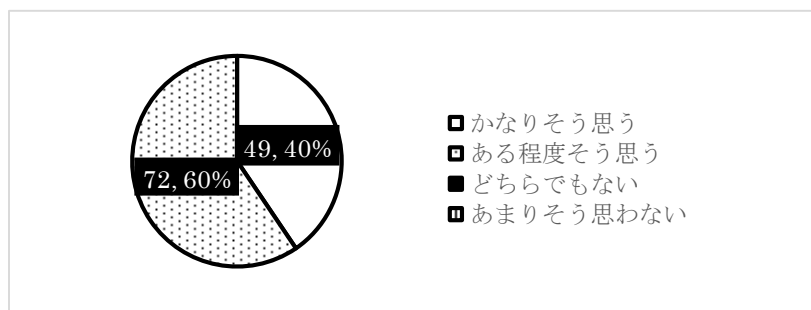


<図 6> 伏牛山世界ジオパークのガイドの解説に対する満足度

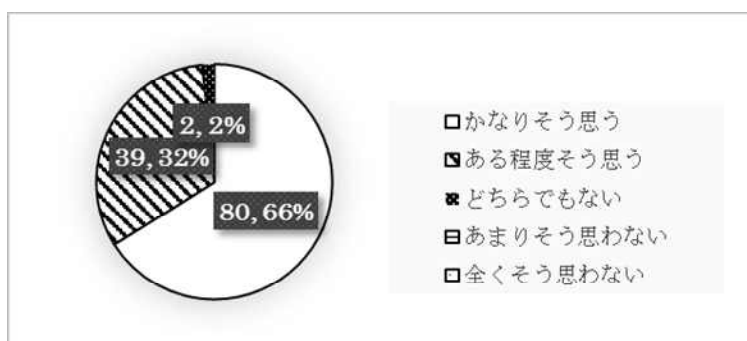


<図 7> 伏牛山世界ジオパークのガイドの解説に対する満足度

4.2.10 「このジオパークに来てよかったと思いますか？」については、伏牛山では、「かなりそう思う」49人(40%)と「ある程度そう思う」72人(60%)とすべて肯定的意見となった(<図 8>)。そして、「島原半島世界ジオパークに来てよかったと思いますか？」については、「かなりそう思う」80人(66%)と「ある程度そう思う」39人(32%)人とほとんど肯定的意見となった。「どちらでもない」が2人(2%)で、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の回答はゼロだった(<図 9>)。

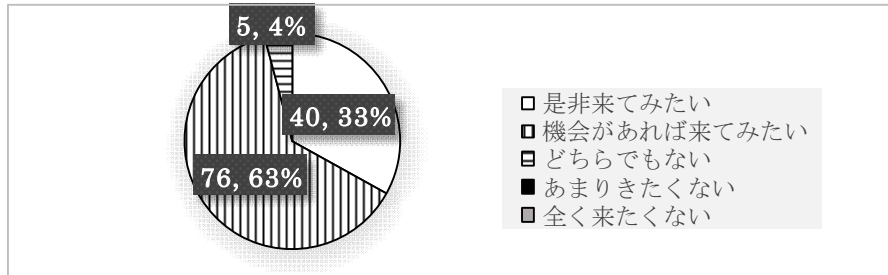


<図 8> 伏牛山世界ジオパークに来てよかった

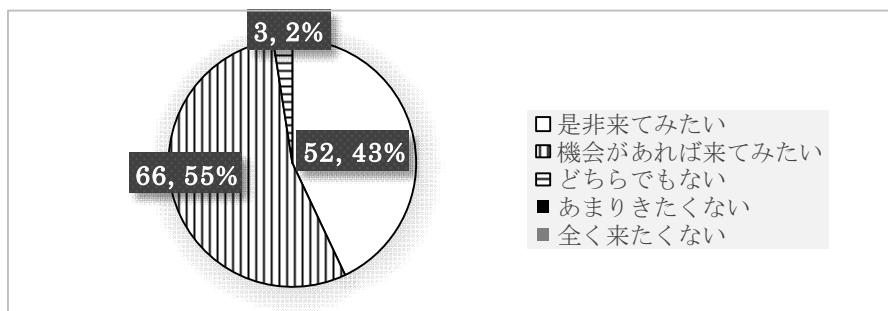


<図 9> 島原半島世界ジオパークに来てよかった

4.2.11 「将来もう一度このジオパークに来てみたいですか？」については、伏牛山は、「是非来てみたい」40人（33%）、「機会があれば来てみたい」76人（63%）、「どちらでもない」は5人（4%）である（<図 10>）。島原半島は、「ぜひ来てみたい」52人（43%）と「機会があれば来てみたい」66人（55%）を合わせると、全体のほとんどを占めた。「どちらでもない」のは3人（2%）である。「あまり来たくない」、「全く来たくない」の回答は両方ゼロだった（<図 11>）。

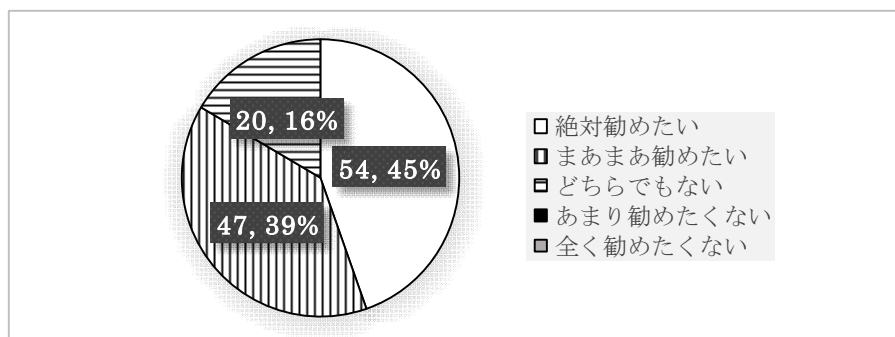


<図 10> 伏牛山世界ジオパークにまた来たい

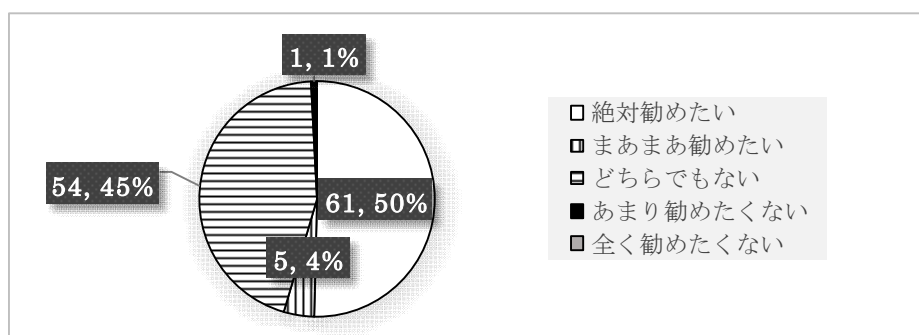


<図 11> 島原半島世界ジオパークにまた来たい

4.2.12 「知り合いの人にここを勧めたいと思いますか？」については、伏牛山は「絶対勧めたい」という回答が54人（45%）、「まあまあ勧めたい」は47人（39%）となり肯定的意見が8割を超えた。「どちらでもない」は20人（16%）、「あまり勧めたくない」と「全く勧めたくない」の回答はゼロだった（<図 12>）。島原半島は、「絶対勧めたい」という回答が全体の半数61人（50%）、「まあまあ勧めたい」は5人（4%）、「どちらでもない」は54人（45%）の半数に近い、「あまり勧めたくない」1人（1%）と「全く勧めたくない」の回答はゼロだった（<図 13>）。

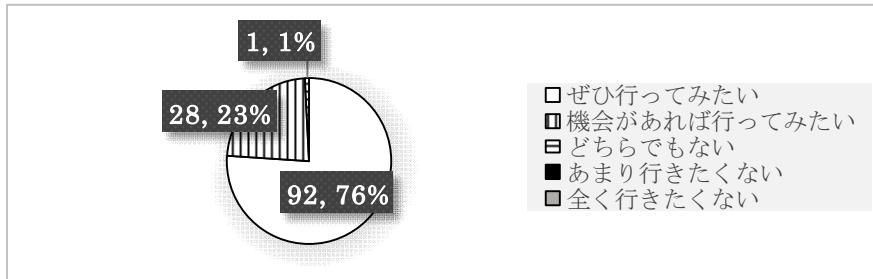


<図 12> 伏牛山世界ジオパークを知り合いの人に勧めたい

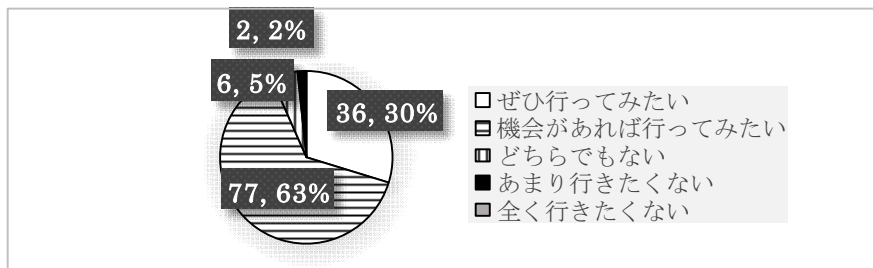


<図 13> 島原半島世界ジオパークを知り合いの人に勧めたい

4.2.13 「ほかのジオパークにも行ってみたいですか？」については、伏牛山は、「ぜひ行ってみたい」92人（76%）と「機会があれば行ってみたい」28人（23%）を合わせると、全体のほとんどを占めた。「どちらでもない」は1人（1%）、「あまり行きたくない」と「全く行きたくない」の回答はゼロだった（<図 14>）。島原半島では、「ぜひ行ってみたい」36人（30%）と「機会があれば行ってみたい」77人（63%）を合わせると、全体の9割を占めた。「どちらでもない」は6人（5%）、「あまり行きたくない」2人（2%）、「全く行きたくない」の回答はゼロだった（<図 15>）。



<図 14> 中国のほかのジオパークにも行ってみたい



<図 15> 日本のほかのジオパークにも行ってみたい

3.2.14 「この世界ジオパークの良い点と良くない点は何だと思えますか？」については記述式の回答を求めた。

その結果、伏牛山では、肯定的な意見として、「自然景観の素晴らしさ」（6人）、「自然の豊かさ」（6人）、「ガイドの説明が良かった」（1人）、「案内板が分かりやすい」（1人）が挙げられた。また、否定的な意見として、「交通が不便」（3人）、「衛生上や投棄ごみの改善」（2人）、「入場料が高い」（1人）が挙げられた。

島原半島については、肯定的な意見として、「自然の豊かさ」（15人）、「人との触れ合いがあって、人の親切さを感じる」（8人）、「水がきれい」（6人）、「ガイドの説明が良かった」（3人）、「温泉があること」（2人）、「迫力ある、美しい、全体的に良かった」（2人）、「町景観の素晴らしさ」（2人）、「多様な見学、勉強ができる」（2人）、「交通面での行きやすさ」（1人）、「地域全体が頑張っていること」（1人）、「跡などをよく保存していること」（1人）が挙げられた。また、否定的な意見として、「もっとアピールすること、情報の発信」（18人）、「交通アクセスの悪さ」（11人）、「説明案内板が少ない」（1人）、「鯉の泳ぐ町について車乗り入れの規制してほしい」

(1人)、「火山や災害など研究成果や展示物を充実すること」(1人)、「観光面の充実」(1人)、「目的不明」(1人)が挙げられた。

5. 日本と中国のジオパークを訪れる観光客意識から見たジオツーリズムの特徴

ジオパークを訪れる目的については、それぞれのジオパークの観光客ともに、まず自然景観の素晴らしさを挙げており、観光客にとって、地質資源への関心というよりも自然景観に触れ、楽しむという目的を第一義にしていることは明らかであろう。また、回答数の多い順も同じように豊かな自然、貴重な地質遺産、地域文化、知識を得る事となっている。もちろん、自然を堪能し、保全・保護意識を高めることもジオパークの目的ではあるが、ジオパークは、その地域独自の地形・地質景観について、一般市民への教育的意義を周知させると同時にその自然景観を維持してきた人々の長い暮らしの営み、そこから育まれてきた文化の重要性をも強調する総合的な概念である。その観点については、双方の観光客ともに、ジオパークの地質的な見どころと、それと一体になった人文景観の存在について、まだ十分認識されていないのが現状である。

アンケート調査によると、伏牛山ジオパークを訪れた観光客は20代と30代の若年層が比較的多く、全体でも7割以上の人々が世界ジオパークという言葉を目にしたことがある人々だった。世界ジオパークに関する情報を得る手段として最も多いのはインターネット、次は現地に来て目にした看板や園内施設、本や雑誌、新聞が続き、テレビ番組は少数であった。この結果から、中国においてジオパークという言葉は、ある程度認知されていると言えるだろう。また、インターネットはジオパークをアピールするために、効果的な媒体と考えられる。それとともに、ジオパークを訪れ、掲示の看板や園内施設から伏牛山が世界ジオパークであると知った人も少なくなかったことから、世界ジオパークの統一ロゴなどジオパークのエリア外でも統一的な視覚効果によってジオパークをアピールすることは有効であろう。

島原半島世界ジオパークを訪れた観光客は60代が多数で、九州内の近隣都市からの来訪が7割を占めていた。観光客の年齢層は、伏牛山は20代・30代に集中し、同時にインターネットでジオパークに関する情報を得る人が最も多い点と、島原半島では60代が多くを占め、本・雑誌・新聞でジオパークに関する情報を得る人が一番多い点からは、より多

様な媒体を活用することによってアピール力を高める情報発信が必要と言える。

また、島原半島の観光客の過半数が、「島原半島ジオパークで特に必見のスポットがあると思わない」という回答を寄せたことも、ジオパークの一般への浸透不足と連動していると考えられる。要するに、ジオパークという言葉を知ってはいるものの、実際にジオパークとはどのような知的興奮が得られるか、ジオパークが市民に投げかけている仕組みそのものがまだ理解されていない可能性がある。なお、島原半島世界ジオパークで必見のスポットであるとする回答の中で、雲仙岳災害記念館や土石流被災家屋保存公園などの噴火災害の過去を伝える施設が多く取り上げられていたことは、人々の記憶の中に災害に対するインパクトが強かったことが読み取れる。

それはジオパークの役割の特徴である防災教育とは合致しているが、今回のアンケート調査で「(この種の)知的欲求が満たされることを期待してきた」という趣旨の回答をした人は少数派であったことは、ジオパークが環境・防災教育に果たすべき社会的役割と、いわゆる観光客が地域に期待する見どころに齟齬が生じている事実を端的に示している。つまり、このような社会教育的要素をいかにジオパークのプログラムの中に取り込むかが課題になる。このため、観光客に対しジオパークへの理解と浸透を図るには、主たる関係機関が率先し、ジオパークの提供しているシーズを一層明確に発信することが求められる。

島原半島を訪れる目的が明確ではない、あるいは、ジオパークの仕組みを十分理解できていないとしても、98%の観光客が「(島原半島の)ジオパークに来てよかった」「将来もう一度来てみたい」としている。さらに、9割以上の観光客が「日本のほかのジオパークにも行ってみたい」との意欲を示した。ジオパーク自体への当初の興味関心が低いにもかかわらず、観光客の訪問後の評価が高い理由は何であろうか。それは、本地域は日本で最も古い国立公園としても有名で、自然観光地としての強いイメージが定着しているため、多くの観光客にとって、来訪動機は国立公園としての誘客力とも考えられる。つまり、実際現地に来て体験して楽しさを感じる人が多く、その際、世界ジオパークに認定されていることを認識しているのではなかろうか。それは、来訪後の観光客の評価が高い理由の要因につながっていると解釈される。さらに、この地域について詳しい住民ガイドの存在も注目される。ガイドの解説によって、地域の魅力を十分味わい、知的な楽しみに心を動かされた結果、ガイドの役割に8割以上の観光客が満足している。同時に、ガイドの解説をとおして能率よく知識を得たと思う観光客も8割を占めており、ジオパークとの触れ合い、体験を深める上でガイドの重要性を伺い知ることがで

きる。ジオパークにおける地形や地層といった地球科学的な要素は、一見すると難解なイメージが先行するが（深見, 2010 ; 大野, 2011）、ジオパーク地域へ体験に赴くまでの障壁を超えさせる必要がある。そのためにも、地域住民や観光業界などが知恵を出し合っ、多様な切り口を観光客に提示していく工夫が不可欠である。

ところで、「知り合いの人にここを勧めたいと思いますか？」については、日本の観光客は5割が「勧めたい」と回答したのに対して、残りの5割は「どちらでもない」と回答した。「（島原半島の）ジオパークに来てよかった」「将来もう一度来てみたい」「日本のほかのジオパークにも行ってみたい」すべての回答者が9割以上にもかかわらず、他者に本地域への来訪を勧めたいという回答が半数にとどまっているのは意外とも言える。理由として、1990年から5年にもわたった普賢岳噴火災害により、島原半島を訪れる観光客は半減しその後もかつての数字にまで回復しきれていない。その間に、観光客は「温泉」と「火山」という地域資源を持つ阿蘇や湯布院、別府などに行き先を変更したことも関係していると考えられる。さらに、その期間に、高速道路の開通や観光特急列車の運行により交通アクセスの向上が顕著であったことも注目しなければならない。実際、日本のジオパークは、かつて自然災害を経験し、復旧・復興の課題を抱えるなど厳しい条件下の地域も少なくない。そこで、ジオツーリズムは持続可能な地域づくりの強力なツールとして重視されている。その際、一度客足の遠のいた観光地に人々が戻ってくるのは、容易ではないことも踏まえながら、新たなジオストーリー作りが求められる。

そこで、やはりそれぞれのジオパークのイメージを伝える役割を担う住民ガイドの存在はいやが上にも高まってくる。つまり、いかにジオストーリーを設定しジオパークの見どころをわかりやすく観光客に伝える技能を身につけているかが問われる。深見(2013)は「ジオ」は地質や景観を対象としつつ人間がそれらとかかわってきた「大地の遺産」としてストーリーを構築していくことが重要だと指摘している。また、アンケート調査においてのガイドに対する評価の中では、無償ボランティアガイドであったがゆえに、観光客の評価が比較的に好意的結果へのバイアスをもたらした可能性も否定できない。今後、島原半島はガイドの有償化など、質の高いガイド制度を確立させることが急務である。

一方、ジオサイトの案内板やガイドに対する評価の質問項目について、伏牛山では不満や低評価の回答はほとんどみられず、また、「ジオパークに来てよかった」「将来もう一度来てみたい」「中国のほかのジオパークにも行ってみたい」のはすべて9割を超えた。「知り合いの人にここを勧めたいと思いますか？」の質問については、8割が肯定的

であった。実際に、中国の石林世界ジオパークの管理局によると、毎年観光客が約100万人訪れているが、同ジオパークの提供するサービスへのクレームは10件もないほど非常に高い満足度を維持している。その理由は、ジオパーク管理局が交通、トイレ、ガイド、科学普及のための教育システムと生態系復元プロジェクトに多額の資金投入を行ったことにより、施設設備などが大幅に改善された点が大きいという (Li, 2015)。

5.1 日本ジオパークにおけるジオツーリズムの特徴について

日本のジオパークにおける観光客意識から、日本におけるジオパークとジオツーリズムの定義の特徴を踏まえ、日本のジオパークにおけるジオツーリズムの特徴を見出される。

① ストーリー性を重視する

日本のジオパークにおけるジオツーリズムは、地形や地質と人間の歴史と文化にまつわるストーリーを観光客や地元の住民に伝えることので、ジオパークの見どころに対する十分な理解を図ろうとしている。それらを観光客に伝える役割を担うのは住民ガイドである。地域に対するイメージはガイドの力量次第で変わり得るし、リピーターも増えジオパークへの関心を引き起こすことができる。そのガイドの養成は、今後の重要な課題である。質の高いガイドからは満足度の高い話を聞け、地域に対する理解を深める観光客が増えていく効果が期待できる。中国の世界ジオパークには、質の維持を有料制と習熟別の明示といった制度化が徹底されており、他国のジオパークに対しても有用なモデルとなるだろう。

② 災害復興に向けた地域振興手段として推進

火山・地震に関わるジオサイトを多く持つ日本ジオパークがGGNに加盟（世界ジオパークが誕生）したことによって、世界ジオパークの活動に「防災教育」の役割も強調されるようになった。それは、2012年に島原半島ジオパークにおいて開催された、第5回ジオパーク国際ユネスコ会議で採択された「島原宣言」にも盛り込まれた日本ジオパークの特徴とも言える。日本のほとんどのジオパークは災害発生のリスクや、被災経験など復旧・復興の課題を抱えた地域のため、ジオツーリズムを通じて、復興や地域経済の発展

を図ることを目指している。改善の余地については、日本ジオパークは住民主導の性格を比較的重視している。ため、各ジオパークで行われたジオツーリズムは、地域の事情により成熟度にばらつきが大きいと予想される。ただし、本論で述べてきた島原半島世界ジオパークで見られたジオツーリズムにおける課題は、まだ歴史が浅い日本のジオツーリズムの全体的な課題と見なすことができる。質の高いガイド（ジオガイド）の養成、ジオサイトやウェブサイトからの情報発信を充実すること、加えて、ジオパークにおける防災の教訓を踏まえて、今後求められる展望や将来像をどう考えるかという点がキーワードとなるだろう。

5.2 中国のジオパークにおけるジオツーリズムの特徴について

楊・深見（2013）は中国のジオパークの利点次のように述べている。

- 「① 1つのジオパークの面積が広大で、地球科学上、重要な意義を有する景観や豊かな水・森林資源からもたらされる多彩な生態系を有している。それらの自然資源に加え、中国の歴史的人物に関するストーリーなど人文的資源が豊富なサイトも多数点在し、多くの人々の関心を呼ぶ要素が融合したテーマパークのような性質を持っている。
- ② 主に国内でも開発途上の地域に位置しており、観光による地域経済の発展を目標としたジオツーリズムを推進するために、国や地方政府との強力な連携体制が築かれている。
- ③ 国土資源省から定められた指針や制度に基づいてジオパークの整備や運営をおこなうことで、ジオツーリズムの質の担保が図られており、ジオパークごとにばらつきが小さいと考えられる。」

中国のジオパークにおける観光客意識にこれらの利点と見られた中国ジオパークの特徴、そして中国におけるジオパークとジオツーリズムの定義を踏まえて、中国のジオパークにおけるジオツーリズムは次のような特徴を析出することができる。

- ① ジオツーリズムは地質テーマを含んだ自然観光と捉える

中国の観光客は地形・地質も含んだより広範な自然観光の概念と捉えている意識は、ジオパークの事務局側とも合致し、それは、現在の中国におけるジオツーリズムの特徴とも言えよう。

- ② ジオツーリズムが着実な歩調で展開するため、必要な基盤整備や人材育成への財源

は政府が保障現在の中国は経済成長が著しく、国内での交流人口の市場規模は急激に拡大している。そのため、ジオパーク認定の効果が表れやすい状況にもあるが実際、今回のアンケート調査は、観光客がジオパークやガイドに対する満足度は非常に高いことが分かった。それは、政府主導で認定地の選定がなされるために、観光客の満足度につながり基盤整備や人材育成などが徹底されている結果である。ただし、政府主導のジオパークのため、地域住民の参画面に改善の余地が大きいことは（楊・深見, 2013）、ジオツーリズムを通じた地域の持続的な発展を維持する上で注視すべき課題と言える。

6. おわりに

本稿は、日本の島原半島世界ジオパークと中国の伏牛山世界ジオパークで実施したアンケート調査の結果から、日中それぞれの観光客意識から日本と中国のジオパークにおけるジオツーリズムの特徴を明らかにすることを目的に論を進めてきた。

その結果、観光客は、ジオツーリズムを通じて地域の魅力に触れ、ジオパークに関心を持つようになるという過程を明らかにした。ジオパークは持続可能な地域づくりにつながるジオツーリズムの展開に将来性が見出せる。比較的、日本のジオパークにおいて課題が検出されたが、ジオパークやジオツーリズムの役割を踏まえてコンテンツの充実を図ることで、現状の改善が期待できる。中国のジオパークは、観光客からジオパークやジオツーリズムに対して、高い評価を得ている一方、地域住民の参画という点が、持続的な地域づくりにつなげていくことができるか課題として残る。したがって、GGNの3つの目標を達成するために、日本と中国のジオパークは、国民がジオパークの仕組みに対する理解をさらに深め意識を高めるには、まだ多くの努力が必要である。

参考文献

- 岩田修二(2012). 「大地の遺産」の集合体としてのジオパークの提唱. 立教大学観光学部 紀要, 14, 5-17.
- 遠藤和子(1995). 河村能夫・星野 敏・目瀬守男 著 『地域活性化シリーズ(8) 地域活性

- 化と計画』. *農村計画学会誌*, 14(3), 55-56.
- 大野希一(2011). 大地の遺産を用いた地域振興—島原半島ジオパークにおけるジオストーリーの例—. *地学雑誌*, 120(5), 834-845.
- 菊地俊夫・岩田修二・渡辺真人・松本淳・小出仁(2011). 特集号「ジオパークと地域振興」—巻頭言—. *地学雑誌(Journal of Geography)*, 120(5), 729-732.
- 太田隆之(2010). 観光地再生のための政策課題と地域政策の可能性・方向性. *静岡大学経済研究センター研究叢書*, 8, 12-47.
- 梶原宏之(2014). 類似制度との比較からみたジオパークと地理学の役割. *E-journal GEO*, 9(1), 61-72.
- 加藤麻理子・下村彰男・小野良平・熊谷洋一(2003). 地域住民による観光ボランティアガイド活動の実態と動向に関する研究. *ランドスケープ研究*, 66(5), 799-802.
- 小寺倫明(2011). 地域資源活用による地域経済活性化の可能性 - 山陰海岸ジオパークを活用した地域づくりに関する一考察-. *商大論集*, 63(1/2), 121-142.
- 斉藤清一(2010). 地域活性化ジオパークと地域振興—品質保証のある大地の見どころ. *地質と調査*, 4, 6-11.
- 関谷 忠(2013). 地域経営の時代—観光型商店街の研究から—. *マネジメント・ジャーナル*, 5, 28-42.
- 高木秀雄(2013). ジオパークを活用した地学教育の実践. *稲田教育評論*, 27(1), 165-182.
- 田代 豊・尾方隆幸(2012). 沖縄島北部で実施したジオツアー参加者の意識. *沖縄地理*, 12, 17-24.
- 平野勇(2008). 『ジオパーク-地質遺産の活用・オンサイトツーリズムによる地域づくり』. オーム社.
- 深見 聡(2010). ジオパークとジオツーリズムの成立に関する一考察. *地域総合研究*, 38(1), 63-72.
- 深見 聡・有馬貴之(2011). 九州のジオパークに対する観光客のイメージ —4つのジオパークにおける観光客アンケート調査から. *地域環境研究*, 3, 47-54.
- 深見 聡(2013). ジオパークとジオツーリズムの展望—日本と中国の事例から—. *人文地理*, 65(5), 434-446.
- 宮原育子(2008). 生活者の視点をジオパークへ—地域観光振興の立場から. *地理*, 53(9), 50-54.

- 宮本善和・伊藤太久・植田純子・松原典孝・原口 強・天野一男(2012). ジオツアーにおける外国人モニターの行動分析と外国人の誘客に向けた提言. *地域活性研究*, 3, 289-296.
- 宮本善和・植田純子・伊藤太久・松原典孝(2011). 国人を対象としたジオツアーにおけるモニターの行動分析. *日本観光研究学会全国大会学術論文集*, 26, 153-156.
- 目瀬守男(1998). 地域資源を生かした地域活性化と住民参加型の地域計画手法(SS法)の開発. *岡山大学農学部学術報告*, 87, 215-225.
- 目代邦康・菊地俊夫・渡辺真人・渡辺一徳・大野希一・長谷義隆・鶴飼宏明・廣瀬浩司・崎田博之・岩本 薫・井村隆介・横山秀司・深見 聡(2012). 九州のジオパークの現状とこれから. *E-journal GEO*, 7(1), 94-102.
- 矢島道子(2009). ジオパークとは何かー日本型ジオパークへの提言. *観光文化*, 33(4), 12-15.
- 楊 燕・深見 聡(2013). 中国のジオパークにおけるジオツーリズムの現状と課題ー伏牛山世界ジオパークの事例からー. *地域生活学研究*, 4, 12-24.
- 口山秀司 編(2014). 『ジオツクリズム論 大地の遺産を訪ねる新しい口光』. 古今書院.
- 渡辺真人(2008). 動き始めた日本のジオパーク活動. *地理*, 53(9), 26-31.
- 渡辺真人(2011). 界ジオパークネットワークと日本のジオパーク. *地学雑誌*, 120(5), 733-742.
- 渡辺真人(2014). ジオパークの現状と課題. *E-journal GEO*, 9, 4-12.
- 陈安泽(2003). 中国国家地质公园建設的若干问题. *资源・产业*, 5(1), 58-64. (C)
- 许涛・田明中(2011). 地质旅游的概念辨析. 陈安泽・姜建军・赵逊编 : 『旅游地学与地质公园建设—旅游地学论文集第十七集』. 15-21. (C)
- Dowling, R. K. & Newsome, D.(2006). *Geotourism*. Elsevier, Amsterdam. (E)
- Dowling, R. K. (2011). Geotourism's global growth. *Geoheritage Journal*, 3, 1-13. (E)
- Fukami, S.(2014). Potential Construction of a Geopark in Small Islands Preliminary Qualitative Action Research on the Geopark Concept in the Mishima Village, Kagoshima Prefecture, Japan. *Northeast Asia Tourism Research*, 10(1), 289-309. (E)
- Li, Z.(2015). Investigation and study on community's developing and protection of Shi Lin Geopark. Presentation on the 4th Asia-Pacific Geoparks Network San'in Kaigan Symposium. (E)

Newsome, D. & Dowling, R. K.(2010). *Geotourism: The Tourism of Geology and Landscape*. Goodfellow Publishers. (E)

(C): written in Chinese

(E): written in English

접수일(2016년 09월 09일)
수정일(2016년 10월 11일)
게재확정일(2016년 10월 28일)
3인익명 심사필

**Characteristics of Geotourism through a Comparison between
Chinese and Japanese Geopark
: A Questionnaire Survey to Tourists**

Yang, Yan*

Abstract

From 1999 the UNESCO proposed the Geopark, Global Geoparks Networks (GGN) are rapidly expanding. Geopark are also increasing in Japan, geotourism in the Geopark has attracted considerable attention as a means to realize the regional development. In this study, the conducted questionnaire survey targeted Unzen Volcanic Area Global Geopark (Japan) and Funiushan Global Geopark (China) with an aim to clarify the characteristics of geotourism.

As a result, it was found that there is a difference in the consciousness of the Japan-China bilateral tourists to the Geopark and Geotourism. Concretely, geotourism in Japan attaches its importance to story, and has been promoted as a tool for the development of the local and regional economy for mostly areas that were once located under severe areas such as once a natural disaster areas. On the other hand, in China, geotourism is recognized as a wider range of nature tourism which include the topography and geology. In order to increase the number of visitors, the source of funds for the necessary foundation facilities and training talented personnels is burdened by government . In addition, they also have their own challenges, however, in order to achieve the three overall objectives of the Global Geoparks Network, both Japanese and Chinese geoparks should make more efforts to raise public awareness of the Geopark system and geotourism.

Keywords: funiushan global geopark, unzen volcanic area global geopark, geotourism, awareness, regional development

* Graduate Student, Doctoral Program in Fisheries Science and Environment Studies, Nagasaki University, Japan. E-mail: yangyansky@live.jp